



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

梵雲庵漫録

淡島寒月

底本：「梵雲庵雜話」岩波文庫、岩波書店

1999（平成 11）年 8 月 18 日第 1 刷発行

梵雲庵漫録

淡島寒月

幼い頃の ^{おぼ} 朧ろげな記憶の糸を ^{たど} 辿って行くと、江戸の末期から明治の初年へかけて、物売や見世物の中には随分面白い ^{かわ} 異ったものがあった。私はそれらを順序なく話して見ようと思う。

—

まず第一に挙げたいのは、花見時の上野に ^よ 好く見掛けたホニホロである。これは ^{とうじん} 唐人の姿をした男が、腰に ^{はりこ} 張子で作った馬の首だけを ^く 括り付け、それに ^{またが} 跨ったような格好で ^{むち} 鞭で尻を叩く真似をしながら、^{あっちこっち} 彼方此方と駆け廻る。それを少し離れた処で柄の付いた八角形の ^{めがね} 眼鏡の、凸レンズが七個に区画されたので ^{のぞ} 覗くと、七人のそうした姿の男が ^は 縦横に馳せ廻るように見えて、子供心にもちょっと恐ろしいような感じがしたのを覚えている。

その頃の上野には御承知の黒門があって、そこから内へは一切物売を厳禁していたから、元の雁鍋の辺から、**ど**んと**ど**んと称していた三枚橋まで、物売がずっと店を出していたものだったが、その中で残っているのは菜の花の上に作り物の蝶々を飛ば

せるようにした蝶々売りと、一寸か二寸四方位な小さな^{たこ} 凧 へ、すが糸で糸目を長く
付けた凧売りとだけだ。この凧はもと、木^{こびきちよう} 挽 町 の家主で兵三郎という男が^{こし} 拵 らえ
出したもので、そんな小さいものだけに、骨も竹も折れやすいところから、紙で巻くよう
にしていわゆる^{まきぼね} 巻 骨 というとも、その男が工夫した事だという。

物売りではないが、^{べにかん} 紅 勘 というのはかなり有名なものだった。^{あさぎ} 浅 黄 の石持で柿
色の袖なしに^{たっつけ} 裁 布 をはいて、腰に七輪の^さ アミを提げて、それを叩いたり三味線を
引いたりして、種々な音色を聞かせたが、これは芝居や所作事にまで取り入れられた
ほど名高いものである。

二

それから両国の広小路辺にも随分物売りがいたものだった。中で一番記憶に残って
いるのは^{さいくあめ} 細 工 飴 の店で、大きな^{ひょうたん} 瓢 箆 や^{はしべんけい} 橋 弁 慶 なぞを飴でこしらえて、
買いに来たものは^{くじ} 籤 を引かせて、^や 当たったものにそれを遣るというので、私などもよく
買いに行ったものだが、いつも^{つま} 詰 らない飴細工ばかり引き当てて、欲しいと思う橋
弁慶などは、^{いつ} 何時も取ったことがなく^{らくたん} 落 胆 したものだった。

物売りの部へ入れるのは妙だが、神田橋本町の^{がんになぼうず} 願 人 坊 主 にも、いろいろ面白
いのがいた。決してただ^{もら} 銭を 貰 うという事はなく、皆何か芸をしたものだけに、その
時々には様々な異ったものが飛出したもので、丹波の荒熊だの、役者の紋当て謎解
き、または袋の中から^{いちもん} いろいなる 一 文 人形を出して並べ立てて、一々言い立てを

して銭を貰うのは普通だったが、中には親孝行で御座^{ござ}いといって、張子の人形を息子に見立てて、胸へ縛^{しば}り付け、自分が負^おぶさった格好をして銭を貰うもの——これは評判が好くて長続した。半身肌脱ぎになって首から上へ真白に白粉を塗って、銭湯^{ざくろぐち}の柘榴口に見立てた板に、柄のついたのを前に立て、中でお湯を使ったり、子供の人形を洗ってやったりするところを見せたものなぞがあったものである。

三

私の生れた馬喰^{ばくろちょう}町の一丁目から四丁目までの道の両側は、夜になるといつも夜店が一杯に並んだものだった。その頃は幕府瓦^{がかい}解の頃だったから、八万騎をもつて誇っていた旗本や、御家人が、一時に微禄して生活の資に困ったのが、道具なぞを持出して夜店商人になったり、従って芝居なぞも火の消えたようなので、役者の中にはこれも困って夜店を出す者がある位で、実に賑^{にぎ}やかなものだったが、それらの夜店商人が使う蠟燭^{ろうそく}は、主に柳橋の薩摩蠟燭^{さつま}といって、今でも安いものだろう。駄^だ蠟^{ろう}という位、酷^{ひど}いものだが、それを売りに来る男で歌吉というのがあった。これがまた、天性の美音で「蠟燭で御座いかな」と踊るような身ぶりをして売って歩いたが、馬喰町の夜店が寂^{さび}れると同時に、鳥羽絵の升^{とばえ}落^{ますおと}しの風をして、大きな拵らえ物の鼠を持って、好く往来で芸をして銭を貰っていたのを覚えている。美音で思い出したが、十軒店^{じっけんだな}にも治郎公なぞと呼んでいた鮎屋が、これも美しい声で淫猥な唄ばかり歌って、好く稻荷鮎^{いなりずし}を売りに来たものだった。

四

明治も十年頃になると物売りもまた変って来て、隊長の鳥売りなぞといって、金モールをつけた怪しげな大礼服を着て、一々^{ことだ}言立てをするのや、近年まであったカチカチ団子と言う小さい^{きね うす つ}杵で臼を搗いて、カチカチと拍子を取るものが現われた。また、それから少し^{くだ}下っては、落語家のへらへの万橋が、一時盛んな人気だった頃に、神田台所町の井戸の傍だったかに、へらへら焼一名万橋焼というものを売り出したものがいて、これが大層好く売れたものであったそうだ。

昔のことをいえば限りがないが、物価も今より安かっただけ、いろいろ馬鹿げた事を考え出す者が多かった故か、物売りにまで随分変わったものがあった。とにかくその頃の女の^{かみゆい}髪結^{まるまげ}銭が、島田でも丸髻でも百文(今の一銭に当る)で、柳橋のおもとといえは女髪結の中でも一といわれた上手だったが、それですら髪結銭は二百文しか取らなかった。今から思えば^{ほと}殆んど夢のような気がする。忙しく余裕のない現代に生活している若い人たちが聞いたら、そこには昼と夜ほどの^{けんかく}懸隔を見出す事であらうと思われる位だった。

(大正十二年四月『七星』第一号)

底本：「梵雲庵雑話」岩波文庫、岩波書店
1999（平成 11）年 8 月 18 日第 1 刷発行

入力：小林繁雄

校正：門田裕志

2003 年 2 月 9 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/)
で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。